

2022年5月29日(日) 9課 使徒言行録 27章 13～38節

週題: 「ともに元気に」

暗唱聖句: 元気を出しなさい。…皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。

使徒言行録 27章 22節

27:13 ときに、南風が静かに吹いて来たので、人々は望みどおりに事が運ぶと考えて錨を上げ、クレタ島の岸に沿って進んだ。

27:14 しかし、間もなく「エウラキロン」と呼ばれる暴風が、島の方から吹き降ろして来た。

27:15 船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができなかつたので、わたしたちは流されるにまかせた。

27:16 やがて、カウダという小島の陰に来たので、やつのことで小舟をしっかりと引き寄せることができた。

27:17 小舟を船に引き上げてから、船体には綱を巻きつけ、シルティスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて海錨を降ろし、流されるにまかせた。

27:18 しかし、ひどい暴風に悩まされたので、翌日には人々は積み荷を海に捨て始め、

27:19 三日目には自分たちの手で船具を投げ捨ててしまった。

27:20 幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えうせようとしていた。

27:21 人々は長い間、食事をとっていなかった。そのとき、パウロは彼らの中に立って言った。「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していなければ、こんな危険や損失を避けられたにちがいません。

27:22 しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。

27:23 わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、

27:24 こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』

27:25 ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。

27:26 わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです。」

27:27 十四日目の夜になったとき、わたしたちはアドリア海を漂流していた。真夜中ごろ船員たちは、どこかの陸地に近づいているように感じた。

27:28 そこで、水の深さを測ってみると、二十オルギアあることが分かった。もう少し進んでまた測ってみると、十五オルギアであった。

27:29 船が暗礁に乗り上げることを恐れて、船員たちは船尾から錨を四つ投げ込み、夜の明けるのを待ちわびた。

27:30 ところが、船員たちは船から逃げ出そうとし、船首から錨を降ろす振りをして小舟を海に降ろしたので、

27:31 パウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と言った。

27:32 そこで、兵士たちは綱を断ち切って、小舟を流れるにまかせた。

27:33 夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。

27:34 だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」

27:35 こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。

27:36 そこで、一同も元気づいて食事をした。

27:37 船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。

27:38 十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

● ショートメッセージ

(文責・H.G)

今週の聖書教育誌の週題は「ともに元気に」です。

パウロはエルサレムに戻ると、イエスを信じた人以外のユダヤ人たちからは、どのように話しても裏切り者のように罵声が浴びせられて暴動のような事態となりました。ローマの千人隊長は暴動を静めるためにパウロの身柄を確保して危険が及ばぬように保護するほどでした。それはパウロがローマの市民権を持っていたことが大きく影響したのでしょう。翌日、彼は何故、パウロがユダヤ人から責められるかを知るために最高法院に引き渡し弁明を一部始終聞いたうえで総督に報告をしました。パウロはローマの市民権持つ者であり、訴えられた問題は処罰に当たらないが何か陰謀あるという報告があったので総督のじきじきの裁きを願い出たのでした。

この騒動の五日後に大祭司アナニアは、長老数名と弁護士テルティロという者を連れて下って来て、総督にパウロを訴え出て、次のように告発しました。

24:5～6 実は、この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の主謀者であります。この男は神殿さえも汚そうとしましたので逮捕いたしました。

総督フェストゥスは、八日か十日ほど彼らの間で過ごしてから、カイサリアへ下り、翌日、裁判の席に着いて、パウロを引き出すように命令しました。エルサレムから下ってきたユダヤ人たちは罪状を言い立てましたが立証することは出来ませんでした。そこで、総督フェストゥスは改めてエルサレムに戻って裁判を受けるかとパウロに告げるとパウロは皇帝の裁判を受けているのだから、ここで裁かれないのなら皇帝に上訴すると告げたのです。こうして、パウロは身の危険から逃れることが出来ないローマへと移送されることを自らの意思で選んだのでした。

それは、パウロの長い間の願いとして何度もローマ行きを望んでいましたが果たされないうままでしたので、これが最後の機会と考えてあえて選んだのでしよう。

ロマ 1:13 兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。

パウロにとってローマは当時の世界の中心であり、文化も政治も栄えていた場所でキリストの福音を告げ知らせる事、すでにローマにいる同信の友と信仰による交わりすることが切なる願いでした。

26:32 アグリッパ王はフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」と言った。

王はパウロのローマでの裁きが厳しいものと分かっていたのでしよう。

ローマへの護送が決まった時、恐らくは、パウロを密かに信奉していた千人隊長は部下で優秀な信頼厚い百人隊長ユリウスに護送の責任を託しました。それはパウロの意をくみとり何があってもパウロを無事にローマに送り届けようとした千人隊長の思いであったように思います。

パウロは陸路ではなく船によってローマを目指す事になりました。途中のシドンでは百人隊長のはからいで弟子たちのところに行くことも許されました。その後、船は風の影響もあってリキア州のミラに着き、そこでイタリア行きの船に乗り換えることになりました。この先は季節の影響もあつたでしょうが風に悩まされ中々に船は目的の港に着くことが難しかったようです。ようやく、クレタ島の「良き港」といわれる場所に着いて風待ちをしたようです。時は紀元 60 年ごろの 9 月から 10 月で冬を迎えようとしてい

た季節でした。当時の船旅は危険を伴うものでした。実際、パウロはⅡコリント 11:25 で「難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。」というほどです。こうした経験もあってこの時期に船を出すことは危険なので、この「良い港」で冬をやり過ごそうと提案しますが、百人隊長は船長や船主の意見を聞いて同じクレタ島のフェニクス港を目指し船出をしたのでした。しかし、船出して間もなくクレタ島の山から吹き下ろす「エウラキロン」と呼ばれる北東からの暴風に襲われて操船の自由を失い、南西の方角へと流されます。それが幾日も続き「ついに助かる望みは全く消えうせようとしていた」ほどでした。乗り組んでいた全員がただ一人除いてそう思っていました。パウロはこの絶望の淵のなかで三つの言葉を言って諦めないように励ましたのです。「元氣を出しなさい」「とどまっていなさい」「どうぞ何か食べてください」

パウロは皆に語りかけます。「船は失うが皆のうちで命を失うものはいない。私の信じる神からの天使が『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』」ですから、皆さん元氣を出しなさい。私に告げられたことは必ずそのとおりになります。」力強く語るパウロに恐れていた人たちは我に帰ったことでしょう。十四日間も漂流した船は真夜中頃に船員が陸地が近いと気づいて自分たちだけ小舟で逃げようとしていました。それを見たパウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と言ったので兵士は小舟の綱をたち切って船員を留めて小舟だけを流してしまいました。

夜が明けてパウロは一同に食事をするように勧めました。パウロは一同の前でパンを取り、感謝の祈りをささげてから裂いて食べて、空腹であった一同は元氣づき充分食べたとパウロに同行していた医者ルカは記録しています。クレタ島から約 870Km 離れたマルタ島に漂着して神の天使が告げた通り乗組員全員 276 人がともに元氣に助かったのです。

パウロは何故、この絶望と恐れの中でも望みを失うことなく望みを持つことが出来たのでしょうか。パウロは嵐の中でも漂流するなかでも人々を励まし、全員の命を守ったのでした。彼の平安はイエス様が示されたように海の風も波も神の御手の中にあるという信頼です。そして自分の命は「ローマに行く」という主の使命を与っており、それゆえに「主はいつも共におられる」との神の約束の中にある平安なのです。

わたしたちの人生の旅路もこの船旅と同じようではないでしょうか。讃美歌 520「人生の海のあらしに」は私の好きな讃美歌のひとつです。主を忘れ、自己中心に生きるときに真の我を忘れ、歩むべき道、帰るべき港を誤った経験はどなたにもあることでしょう。しかし、私たちが人生の嵐にあって不安や恐れに心が支配されようとしているとき、どのように乗り越えてゆけばと悩む時に神は「元氣を出しなさい」「ここにとどまっていなさい」「食事をしなさい」とやさしく語りかけてくださいます。

それが静かに聞こえる神の声であったり、となり人であったりします。パウロに確信が与えられたようには弱い私たちには同じようには出来ないかもしれませんが「思い煩うなかれ」とのみ言葉に救われてきた自分を思いだし励まされています。パウロが食事の時にまず神に祈ったように、祈る人であり、聴く人でありたいと願っています。

● 分かち合い

・私たちクリスチャンはその歩む姿が証しであると聞いたことが有ります。普段の生活のなかで心がけていることがありますか。

・共に集まる事が難しい時期が続きますが、どのようにして繋がればよいか互いに考えてみましょう。

● 次週の予告

「聖靈は語り続ける」と題して使徒言行録 28 章 17～31 節から読みます。今週の「聖書日課と分かち合い」で、日々み言葉をいただきます。